

第103回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

今回は、高等学校での実践についてです。

本実践は、香川県内の普通科高校での実践です。読み書きが苦手である男子生徒のTさんへの支援を紹介したいと思います。

4.1 入学時の状況

Tさんは中学1年の時にLD（学習障害）の診断を受けています。具体的には読字障害と書字障害があるということです。中学校での支援は、授業の録音、テストの問題用紙拡大、ルビうち、国語、理科、社会の試験時間延長、国語の問題の読み上げというものでした。中学校にも理解があり、上記のような支援を受けることができていたということです。

中学校でのこのような配慮の結果、テストの点数は上がり、本校を受験することとなった経緯がありました。本校受験時にも、中学校で行われていた配慮を実施し、Tさんは見事高校に合格したのです。

高校では、Tさんの高校生活を充実したものにするための必要な配慮を検討することとなります。支援の根拠についてもアセスメントから判断することとしました。読み書きに困難さがあることは、入試時の観察でわかっていたのですが、その状態を客観的に知る必要があったためです。インフォーマルな評価だけでは、他の教員と共通理解して、学校全体で支援するということにつながらないと考えたためです。読み書きの評価には、URAWSS（ウラウス）を使用しました。URAWSSはその当時は小学生を対象として標準化された評価ツールだったのですが、本生徒が書字や読字にどのくらい困っているのかを評価するには適当であると考えたからです。その結果、小学校の6年生のデータと比較しても、読むことが極端に遅いことがわかりました。

4.2 授業等における支援

検査の結果とTさん並びに保護者の申し出を受けて、特別支援委員会を開催することになりました。この高等学校では、そこで審議された内容を、全職員に諮ったうえで決定し、全職員で共通理解して取り組むという仕組みになっていました。入学年度当初に全職員で合意を図ることができたので、入学直後から授業等での配慮が実施されることとなったということです。

具体的な配慮は、試験時間の延長、配布物と試験問題の拡大とルビうち、必要に応じてメモを取る際の授業中のICレコーダーの使用でした。その他の細かい要望については、Tさんの申し出に基づいて、その都度、担当教員と本人の間で、合意形成しながら進めていくようにしたのです。

このように、学校での支援が始まることにはなりますが、そこで欠かすことができないのは、保護者の理解とクラスメイトの理解です。今回は、その点についても触れていくようにしたいと思います。

URAWSSとは

読み書きに困難が疑われる小学生の評価キットです。読み書きの速度を評価する目的で開発されており、タッチ&リードなどの支援技術導入を考える上でヒントを提供するものです。学校の先生、心理職の方のみならずご家族でも簡単に実施可能です。介入の効果測定・中学生以上の標準値が一部加わった改訂版の「URAWSS II」が2017年7月より販売開始となりました。

～坂井聡先生の紹介～

((プロフィール))

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

((著書))

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）、クラスルームコミュニケーション（こころリース出版社）、自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（EIPワメント研究所）など